



名古屋大須ロータリークラブ

2009-2010 年度 R.I. 会長
ジョン・ケニー John Kenny
Rotary International President

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-OSU WEEKLY REPORT

<本年度クラブ会長方針>

No.1069

ロータリーの未来は
あなたの手の中に

やっぱり、大須ロータリークラブだね

承認 1985年2月12日 例会日 木曜日12:30 例会場 名古屋東急ホテル
会長 内藤 明 事務局 名古屋市中区栄4丁目6番5号 丸越ビル6F
幹事 柴岡 正将 電話 (052)251-0181 FAX (052)251-0337 〒460-0008
URL <http://www.nagoya-osu.org> E-mail office@nagoya-osu.org



第1262回例会

雑誌月間

平成22年4月11日(日)

春の家族会

大山ライン下り
於 お菓子の城
会員 66名

出席計算数

52名中24名出席
出席率46・15%
前及前回出席率96・43%

ゲスト

元米山記念奨学生
シラトルンアンチャイ・
グンティター
元米山記念奨学生 徐 冬梅
受入青少年交換学生
アンナ・カトウリ・
マチルダ・サハラコルピ
クリスティ・ティン
ご家族の方 16名
事務局 3名

ニコボックス

親睦委員会の皆様、ありがとうございました。

内藤 明・柴岡 正将
前田 隆久・高木 政義
酒井 修・鈴木 基仁

親睦さん、御苦労様です。
近藤宏一郎
楽しかったです。
伊藤 与則

親睦委員会のご活躍を
太田 裕
お世話になります。今日はよろし
岡村 隆徳
くお願いします。

会長挨拶

会長 内藤 明

皆さん、本日は大変お忙しいと
この名古屋大須ロータリークラブ
家族旅行に参加して頂きありがと
うございます。又、ご家族の皆様
方には、日頃からロータリー活動
にご理解・協力を頂いている事を、
この場を借りましてお礼申し上げ
ます。又、今日は参加者の方々の
願いが通り、雨の予報の時もあり
ましたが、天気ももちょうどです。
天気が雨だと何ともなりません
良かったです。

本日の企画をして頂きました山
口親睦活動委員長以下委員の皆様
ご苦労様です。山口委員長ケガの
為欠席ですので、佐藤副委員長に
はお世話になりますが宜しくお願い
いたします。家族の皆様とは家族忘
年会と家族旅行の、年に2回しか
お会いできませんので、本日は有
意義に過したいと思っております。
今年度も残りの2ヶ月半を残す所
になりましたが、気を緩める事な
く、残りの任期を務めさせて頂き
ますので、ご協力の程宜しくお願い

春の家族旅行

四月十一日 大山ライン下り

当日は朝方の小雨の中、空模様
の不安を抱えながら、メンバー、
ご家族、それに留学生等を交え一
行四十七人は、二台のバスに乗り
木曾川・太田橋の乗船場に向かい
ました。

しかし、現地に着くや雨は上が
り、春の暖かな陽さしと今が盛り
の桜花が出迎えてくれ、一同安堵
の心で舟に乗り込みました。

全員が一艘の舟に乗れたことも
あり、早瀬を下る時には子供さん
たちから大きな歓声があがり、弾
む声と水面に遊ぶ鶴を反として、
花ひらの舞う中、小一時間の時を
経て犬山橋に到着。お城で美味し
い風食のあと、奥様、子供さんの
最大目的、アウトレットへと向か

い、名実ともに
お腹と両手に持
つ手提げ袋も一
ぱいにして、帰
路に向かいまし
た。

皆様のお陰で
予定通りの栄に戻
ることが出来



ご協力に感謝すると共に、参加し
て解るロータリーの連帯の楽しさ
を共有する事ができ、意義ある一
日を過ごすことが出来ました。これ
からも一層の親睦活動へのご協力
をお願いいたします。

親睦活動
委員会
一同



2010.4.11 日本ライン下り



■ 新入会員卓話 (4月8日例会)

「健康について」 波多野 敬

私はこの3月から大須ロータリークラブに入会させていただきました。内科医の波多野 敬と申します。現在は、中ビルの4階で一般内科と心療内科を開業しております。

■ 自身の経歴

私は、1975年に名古屋大学を卒業しまして、最初の5年間は内科、外科、産婦人科、小児科などを以前中区にありましたセントラル病院を基盤にして、第一赤病院、名鉄病院やアメリカ力の病院などをきめて研修しました。その後、5年間名古屋大学の環境医学研究所というところで大学院生として、研究生生活をしましたが、名大の環境医学研究所は初め航空医学研究所として出発した経緯がありますので、人間が低酸素状態、即ちエベレストなどの高所に行く時つまり低圧環境下でどうなるのか、あるいは海の中に潜水したりした状態、つまり私達の居る地上での一気圧ではない高圧環境下でどうなるか、あるいは宇宙のような無重力環境下でどうなるのか、そういう特殊環境での人間の生理機能を研究す



る事を目的にした施設でした。ヒトは外環境と自分の体内環境の変化をストレスとして受け止め、可能な限り適応していくのですが、その方法には主に神経調節と体液調節という二つのメカニズムで対応しております。もちろん、それぞれのシステムが、全く独立的に作動するのではなく、お互いに強く関連して全体的な調節をしております。

体液調節というのは、血液循環すなわち心臓や血管を中心とする循環器系と血液循環によって、その標的臓器に運ばれて作用を表すホルモンすなわち内分泌系とから成り立っておりますが、私は内分泌系の中でも血管を収縮させたりにして血圧を上昇させ、腎臓では尿量を減少させる働きをする抗利尿ホルモン、別名をバソプレシンの研究をしておりました。要するに低酸素(低圧)や高圧という特殊環境というストレス状態の時に、抗利尿ホルモンがどのように関与して、ヒトは内部環境を守るか、医学的にいいますとホメオスタシス(恒常性)を維持するかというテーマでした。

『ストレス』が発見されるまでの歴史のまとめ

現在、私達は日常的に『ストレス』という言葉を使いますが、その概念が出来るまでの歴史を要約しますと、19世紀の後半に始まります。

まず、生体の外からの刺激に対して、生体内に存在する条件を『内環境』という言葉を用いて、その重要



性に着目したのが、『実験医学の父』と言われるフランスのクロード・ベルナール(1813-1878)であります。その『内環境』を出来るだけ安定させる事の重要性、すなわち『ホメオスタシス』(生体恒常性維持)という概念を説いたのがアメリカのウォルター・キャンノン(1871-1945)であり、外的刺激と生体恒常性維持のダイナミズムを『ストレス』という概念を用いて説明したのが、ハンガリー系カナダ人のハンス・セリエ(1907-1982)という事が出来ます。

ベルナール、キャンノン、セリエがそれぞれの概念を確立する際の彼らの視点、思考方法、人生に対する決断と実行や生き方について、今日は時間の都合で話せませんが、実に興味深く、私は人生を生きる上でとても参考にになりました。

私の実感を言えば、大変ひねくれているというか、普通の人達とはまるで逆の発想を押し通す人達で、ひねくれたところが私とさっくりのなので共感出来たのでしようが、物事を見るべきの方法を教えてください。(指導者)でした。

例えば、セリエの『ストレス』の発見も、彼がプラハ大学の医学生だった時、教授回診で見た患者たちが皆、違つ病氣にもかかわらず、どこか同じような表情をしていることを不思議に思い、この病氣にも共通する生体反応が存在するのではという疑問の追及から始まっていると言われています。それが、『ストレス』

という概念に結果するわけです。また、私達は現任でも兎角『ストレス』をエカティブなものに見なしがちですが、セリエはかなりの初期から『ストレス反応』が『生体の有害刺激に対する適応過程』であるという側面も見逃して折らず、後年『ストレスを人生のスパイスに』という言葉まで残しているのは、様々な苦難にもかかわらず、彼が持ち続けたオプティミズムを象徴しているようにも思われます。

(後半は次号掲載します。)

4月29日(木) 例会の案内

法定休日

5月6日(木) 例会の案内

定款第5条第1節による休会

5月13日(木) 例会の案内

SPEAK OUT DAY

(地区協議会報告)

広報委員会

- 吉田 明夫 近藤 明美
- 横内 恭・浅井 隆宣